

【専門科目】 次の3問から1問を選択し、答えなさい。

1 日本の遺跡のうち重要なものを1つあげ、考古学的研究の成果をふまえて、その遺跡が持つ歴史的意義について述べよ。

【出題意図】

解答者の考古学研究に関する知識知識を問う。

【解答例】

日本考古学の学史上重要な遺跡として、青森県青森市に所在する三内丸山遺跡を挙げる。三内丸山遺跡は縄文時代前期末から中期にかけて営まれた大規模集落遺跡であり、1992年以降の発掘調査により多数の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、長大な建物跡、貯蔵穴、土坑墓などが確認された。とくに巨大な柱穴をもつ大型掘立柱建物跡や多数の大型竪穴住居の存在は、縄文時代の集落が従来想定されていたよりもはるかに大規模で計画的であったことを示す。また、多様な動植物遺存体が出土したことにより、縄文時代の生業活動の実態も具体的に明らかとなった。さらにヒスイや黒曜石など遠隔地産の石材が確認され、広域的な交流・交易の存在も示されている。これらの成果は、縄文社会を単純な狩猟採集社会とみなしてきた従来の理解を大きく改め、縄文文化の社会構造や定住性を再評価する契機となった点で、日本考古学の学史において極めて重要な意義をもつ遺跡である。

2 文化財研究における保存科学の役割・特質・課題などについて、具体的に文化財を1つ取り上げて論じよ。

【出題意図】

保存科学の基本的な理念や知識について、その背景も含めて問うもの。

【解答例（概要）】

まず保存科学がどのような学問であるかの説明を要する。保存科学は美術、歴史、考古資料など文化財を対象にして、理系の知識や技術によって調査研究、保存を行うものである。

役割と特質については、文化財の調査研究には、肉眼による観察など人文学的な手法が基本になるが、それに加えて理化学機器を用いた調査を行うことで、得られる情報の種類や量が増え、新たな事実が明らかとなるといった点が必要となる。課題に関しては、一つは理化学的調査の中には、鉛同位体比分析や放射性炭素を使った年代測定など、資料の一部を採取して詳細なデータを得る手法が含まれており、その点を踏まえて、どのような情報が必要なのか、どこまでの調査研究を行うべきかを考える必要があるといったことが挙げられる。また文化財の分野や種類、数に対して、保存科学を専門とする研究者や機関が少ない点も課題といえるであろう。

保存科学を用いた文化財研究には産地、年代、材質、構造・技法、保存・保管など様々なものがあり、その中から具体例を取り上げることとなる。例えば絵画におけるX線や赤外線を使った下地の調査、蛍光X線分析などを用いた色材の調査、仏像のX線CTによる構造、内部状況の調査、考古資料に対する材質や構造調査、あるいは年代測定、産地同定（推定）などの事例の説明を求める。

3 日本の平安時代から江戸時代までの絵画のうち重要なものを1つあげ、特徴を説明し、その作品が持つ美術史上の意義について述べよ。

【出題意図】

・解答者の美術資料と美術史研究に関する知識を問う。

【解答例】

和歌山県立博物館が所蔵する日光社参詣曼荼羅は縦148.7 cm、横117.8 cmを計るやや厚手の紙に鮮やかな泥絵の具で高野山麓の日光社の景観を描く。近世まで日光社の祭祀に深く関わった小松家に伝来した。現状では掛幅装となるが、もともとは未使用時には折りたたんでいたことが痕跡からわかり、本来は縦八つ折、横四つ折にし、折りたたんだ大きさはおよそ縦32 cm、横20 cmほどとなる。使用頻度は高かったようで折り目の角付近で欠損部がみられる。

画面中央に社殿三棟を描き、その向かって右に正面四間の堂舎、左に正面三間の堂舎を配置し、これらはすべて檜皮葺として描いている。この五棟は瑞籬で区画し、中央に鳥居を配置する。瑞垣の外には、左方より多宝塔を描き、その前方に板葺の堂舎、鳥居、鐘楼、茅葺建物を描く。さらにその下

に、左側に堂舎と小祠を、中央に茅葺の建物六棟を描き、最下部に川を描いている。

描かれている総数 41 名の人物は、社頭では僧侶と神人、瑞籬中央の鳥居の中に巫女を描き、瑞垣の外にも僧侶が散見されるほか、宗教者や巡礼者、芸能者など聖俗の参拝者を描いて賑わいを表している。上部には三つの峯が描かれ、各々雲で区画されて、象徴的な印象を強めている。画面上部左右両端には、各峯の注記と見られる墨消し部分があるが、下部の文字は赤外線撮影でも読み取れず不明である。

描かれている瑞籬内の建物の正面間口の合計が 12 であることなどから、かつて熊野十二所権現を祀るとする見解が有力であったが、本図の料紙を精密に確認すると、瑞籬内の左側の建物は本来右下に描かれていたものが切断され現位置に貼られていることが分かり、本来は拝殿であったと判断される。祭神名についてはなお検討が必要である。

形式化の見られない伸びやかで自由な人物表現が、清水寺参詣曼荼羅や長命寺参詣曼荼羅など 16 世紀に制作された参詣曼荼羅に通じ、本図の制作時期も室町時代後期と捉えられる。参詣曼荼羅を用いた勧進が地方社寺でも本格的に行われていたことを示す重要資料といえる。

個人の所有として伝来したが、その永続的な保存を図るため、和歌山県立博物館に寄託されたのち、寄贈された。勧進のために製作されたこと、日光社祭祀に関わった家で継承されたことが把握され、地域史理解の上での重要性から県指定文化財への指定とともに安定的な保管と継承が図られたものであり、調査、研究と保存を一連のものとして捉えて継承する文化財学の意義を強くうかがえるといえる。

【英語】

下の文章は興福寺に関するものである。日本語に訳しなさい。

Kōfukuji is the family temple of the Fujiwara clan, which was built in the east of the Heijō capital. Given the influence of the Fujiwara clan, it is likely work on this temple was begun swiftly after the relocation of the capital from Fujiwara to Heijō in 710. The temple complex covers almost an entire block of the capital grid; a thirty hectare area of the eastern extension of the city at the northern corner of Heijō. Within the temple grounds are three golden Buddha halls, an unusual feature and one that illustrates the high rank of Kōfukuji. In the vicinity of the golden halls were accommodation for monks, their dining halls, groups of warehouses, including a treasure house (hōzo), and accommodation for dependent workers. Kōfukuji also flourished in the Heian period. As members of the Fujiwara clan, the Emperor and members of the imperial family of the Heian-kyō capital (now Kyōto) frequently visited the temple. The temple was repeatedly rebuilt as a result of numerous fires and earthquakes and today few of the original buildings remain. MT.

出典: An Illustrated Companion to Japanese Archaeology: edited by Werner Steinhaus and Simon Kaner. (Archaeopress and the Editors 2016)

解答例

藤原氏の氏寺である興福寺は、平城宮の東方に建立された。藤原氏の影響力により、興福寺の建立は 710 年の藤原京から平城京への遷都後、ただちに行われた。寺域は平城京の 1 町分で、平城京の北隅に当たる外京の 30 ヘクタールを占める。寺域には特異な特徴であり、興福寺の高い格を示す 3 棟の金堂がある。金堂の周辺には僧坊、食堂、宝蔵、僧侶以外の労働者を収容する施設などがあつた。

興福寺はまた、平安時代にも繁栄した。藤原氏の一族として、平安京の天皇や皇族がしばしば興福寺に参拝した。興福寺は大火や地震の後に再建され、今日では現存する建物はほとんど存在しない。